

留学生による伊勢崎地域インターンシップ事業の意義

西舘 崇

キーワード

多文化共生 留学生就業支援 双発型インターンシップ 学び合い 伊勢崎地域

要旨

本研究ノートの目的は、著者が NPO 法人「多文化共生ぐんま」と共に実施した「伊勢崎市地域産業での留学生インターンシップによる多文化共生職場づくり実践活動」の意義を、主に大学の立場から検討することである。群馬県伊勢崎市では現在、県内最多となる外国人住民が暮らしており、またその国籍も 60 カ国以上と多様であることから、多文化共生社会の実現に向けた様々な試みが実施されている。著者と多文化共生ぐんまは、そんな伊勢崎市の地域産業において、留学生を対象としたインターンシップ事業を行った。本稿はこの事業の意義として、「留学生自身が地域連携を育む主体となったこと」「受入企業側との学び合いが実現していること」「留学生の就業支援に向けた有用な経験データが集積されたこと」を指摘している。本稿ではまた、今後の留学生向けインターン事業や関連する研究・調査に向けた論点の提示を行っている。

はじめに

日本国内有数の外国人居住者数 53,510 人（2017 年 12 月末）を誇る群馬県にあって、伊勢崎市には県内最多となる 12,139 人（2017 年 12 月末）の外国人住民が暮らしている。国籍も多様であり、ブラジル、ペルー、ベトナム、フィリピンなど、その数は実に 60 カ国以上にのぼる¹。

伊勢崎市の広報誌『いせさき』（2017 年 12 月 1 日号、No.311）を開くと、同市の外国人住民たちの息吹が伝わってくるようだ。「多文化共生」が特集された同広報誌 No.311 の冒頭は、昨年 10 月に開催された「市民交流まつり」における「世界の料理・屋台村」の紹介である。ペルーや韓国、ネパール、タイ、パラグアイなどの料理が写真付きで並ぶ。次のページは、市内各地区に住む外国出身者へのインタビューだ。フィリピン出身の栗原さんは、伊勢崎市は「外国人が多いから、外国人の気持ちを分かってくれる気がします」と指摘。彼女は市役所にて「日本語が下手でも優しく対応して」もらった経験があるようだ。

ベトナム出身のグエンさんは、羽黒町で毎年開催されている「夏祭り」に言及。その上で、同じ地域・団地に暮らす「仲間」として「日本人もベトナム人もいつも笑顔であいさつ」することの大切さを指摘している。彼女ら／彼らの嬉しそうな表情や前向きな気持ちはどこからやってくるのだろうか。その答えの一つは、伊勢崎市やNPO、ボランティアが実施する「日本語教室」「外国人相談窓口」「災害時外国人支援ボランティア」など、外国人住民との共生に向けた様々な取り組みにあるのではないか。

さて、そんな伊勢崎市に隣接する本学が、同市の多文化共生社会づくりに貢献できるとすれば、どのようなことが可能なのだろうか。本学には世界各国からの留学生のほか、外国にルーツを持つ学生が多く学んでいるが、彼らの学びや知見を伊勢崎地域に活かすことはできないか。この問題意識のもと、著者がNPO法人「多文化共生ぐんま（代表：松島郁夫）」と共に実施したのが、平成29年度群馬県多文化共生推進士連携事業「伊勢崎市地域産業での留学生インターンシップによる多文化共生職場づくり実践活動」（以後、留学生インターンシップ事業）である。そこで本研究ノートでは、本事業の概要や実践内容を振り返りながら、その意義を検討してみたい。具体的にはまず、本事業の主体、参加学生、参加企業について述べ、次に事業の目的及び具体的な日程等を説明する。その上で、インターン生の業務日誌や事後のフォローアップ調査の結果を提示する。最後に、本事業の意義を考察しながら、今後の事業や関連する研究・調査に向けた論点の提示を行う。

1 留学生インターンシップ事業の概要

1. 1 事業主体

留学生インターンシップ事業は、NPO法人「多文化共生ぐんま」が共愛学園前橋国際大学国際社会学部の西館研究室を連携先とし、群馬県による平成29年度多文化共生推進士連携事業の助成を得て実施したものである。多文化共生推進士とは「多文化共生の視点に立って、地域課題を解決し、地域活性化を図る人材」として群馬大学が養成し、群馬県が認定・活用する人材である²。多文化共生ぐんまは、この推進士の活動拠点として2015年4月に設立された。本インターンシップ事業を実施する上ではまた、留学生の就学支援事業等で実績のある株式会社クオリティー・オブ・ライフの協力のもと、インターンシップの枠組み設定から参加者に対するフォローアップ調査までを設計した。

本インターンシップの参加学生は、本学英語コース1年でスウェーデン出身のA君である。来日2年目となるA君は伊勢崎市在住で、日本語は日常会話においては問題がない。専門用語についても、専攻分野であれば理解し、発話可能である。受入企業は、伊勢崎市に所在する有限会社スタイル三島家具店である。同店は、職人の業や手仕事による丁寧なものづくりを継承する家具店として1960年に創業³。現在では、北欧からの輸入家具も扱っている。

1. 2 目的

本事業の第一の目的は、伊勢崎地域での留学生インターンシップを実施することにより、外国にルーツを持つ学生たちの学びの幅を広げるとともに、彼女ら／彼らの就業支援の方向性を検討することである。本学には様々なインターンシップ・プログラムがあるが、専門的な業務内容をこなすために必要な日本語能力を踏まえると、プログラムに積極的に参加できる留学生らの数には限りがある。そこで本事業では、外国籍の学生や留学生を対象としたインターンシップの機会を創出することにした。外国にルーツを持つ学生たちの地域企業での学びや経験は、参加学生はもとより、似た背景を持つ学生たちの就業支援にも活かすことができるのではないかと考えた。

第二の目的は、日本人と外国人による協働の可能性を具体的に探ることである。群馬県では現在、「群馬県多文化共生推進指針」（平成 19 年に策定、平成 24 年に改定）の 2 度目となる改定作業が進められているが（2018 年 2 月末現在）、多文化共生推進会議の議事録などを参考にすると、日本人と外国人は、従来のように「支援（サポート）する側」と「支援（サポート）される側」という関係ではなく、「支え合う」関係と捉えることの必要性が指摘されているようだ⁴。支え合う関係の一つの重要なテストケースは、地域における協働である。つまり、地域産業の実際の仕事場で、いかに日本人と外国人が共に働くこと（協働関係）を実現するか、そしてその協働関係のもと、いかに生産性を上げつつ、協働する本人らの生きがいを実現するか、が問われているのだ。

本事業では、この協働の可能性を具体的に探るべく、インターンシップのコンセプトを「双発型」の学び合いとした。通常のインターンシップであれば、インターン生が受入先企業や団体から学ぶことが主目的となる。だが、日本人と外国人との「協働」ともなれば、「教える側」と「教わる側」に分かれた一方的な知識の伝達だけでなく、双方向での学び合いが求められるのではないかと考えたのである。

第三の目的は、外国にルーツを持つ学生らの（擬似的）就業実践・経験データの集積である。伊勢崎市の外国人労働者数は年々増えており、2017 年 10 月の時点では 6,866 人である⁵。2015 年から 2017 年にかけては、前年比で二桁台の増加率を更新中だ。もともと、労働者の増加をもって多文化共生が進んでいるとは言えない。市政や地域企業にとっては、いかに適切な労働・管理体制を構築するかが問われているのだと思う⁶。この点で本事業は、参加した留学生の経験を、誰もが追体験できるように記録すること（つまり、どの段階における、どのような業務内容にて、留学生が何をどう感じたのか／考えたのかなど、一見些細と思われる事柄でも記録として残すこと）により、伊勢崎市における外国人就業支援策を考える際の有用な参照事例となるのではないかと考えた。こうした記録はまた、将来伊勢崎地域で就業を希望する留学生や外国にルーツを持つ学生にとっても、一つの具体的な先行事例として有効活用することができよう。

1. 3 インターンシップの日程とその内容

本事業は次の日程及び内容で実施した。まず、事前準備として、2017年9月15日に「事前面接・プレインターンシップ」を行った。ここでは、インターン参加学生と受入企業の担当者を交え、本事業の概要や目的を確認すると共に、今後の日程やインターンシップの内容について検討した。次に、実際のインターンシップを2017年11月に5日間（3日、10日、17日、19日、24日）にわたり行った。各日の業務内容は以下の通りである。

11月3日：三島家具店にて商品オリジナルランキングのブログ作成・接客

11月10日：三島家具店にて商品研修、オリジナルランキングのブログ作成

11月17日：茶房「^{ひいき}轟（※1）」にて、おもてなし研修・接客

11月19日：終日配送業務補助

11月24日：「STYLE'S STYLE WORK'S（※2）」搬入・会場設営・コンセプト説明

※1 茶房「轟」は有限会社スタイル三島家具店内にある喫茶店。

※2 有限会社スタイル三島家具店が実施する展示イベント。

1. 4 フォローアップ調査の方法

インターン期間中の学生の学びや気づきを把握しつつ、インターン事業後の振り返りを効果的に行うため、本事業ではインターン生に「業務日誌」を作成するよう指示を出した。加えて、次のようなフォローアップ調査を行った。まず、業務日誌をもとにした定期的な対話をインターン生と担当教員（西舘）との間で行い、業務中に考えたことや感じたことについての共有を行った。インターン終了後にはまた、インターン前後の考えや学びについて比較検討を行うため、幾つかの質問項目を設定し、そのそれぞれについて回答させた。質問項目は以下の通りである。

＜自身の学びについての比較検討項目＞

- ・インターン前後における日本の家と北欧家具についてのイメージについて
- ・インターン前後における日本企業に対するイメージ及び日本で働くことについて

＜本事業が「双発型インターンシップ」であることを踏まえた項目＞

- ・本インターンシップから得た最大の学びとは何か
- ・三島家具に対する最大の貢献とは何か
- ・三島家具はA君をインターン生として採用することでどのような学びがあったと思うか
- ・同じ機会があれば、他の留学生に勧めたいか、そしてそれはなぜか
- ・自由なコメント

最後に、インターン終了後の成果報告として、インターン生は2018年2月4日に開催され

た平成 29 年度多文化共生シンポジウム「ぐんまの宝『外国人』と一緒に未来を創る～多文化共生共同活動事例発表～」(群馬県主催)にて登壇し、成果を報告した。

2 インターン生による業務日誌とフォローアップ調査の結果

2. 1 業務日誌

インターン生による業務日誌の内容を提示する。原文は日本語と英語の両方で作成しているが、英語については割愛し、日本語については簡単な誤字脱字の修正に留めた⁷⁾。各日の様子は下表の通りである。

表 1 業務日誌のまとめ

	内容と気づき
第 1 回 (11 月 3 日)	<p><三島家具店にて商品オリジナルランキングのブログ作成・接客></p> <p>学校が終わったら自転車で三島家具さんに行き、着いたら、最初はスタッフさんたちと挨拶をして、店長と少し会話した後、その日の仕事が始まった。店内に置いてある家具や雑貨から 10 個を選び、おすすめランキング付けをした。それにはおすすめの理由も必要だった。最初は英語のノートで考えをまとめて、次に選んだものを店長に一個ずつ説明した。</p> <p>この仕事は思ったより難しかった。自分がなんとなく良いと思った家具をなぜそう思うかを説明しようとした時に、言葉がなかなか見つからなかった。日本語だけでなく、英語でも私はボキャブラリーを増やしたいと思った。</p>
第 2 回 (11 月 10 日)	<p><三島家具店にて商品研修、オリジナルランキングのブログ作成></p> <p>二回目はだいたい一回目と同じ流れだった。一番大きな違いは、今回の製品の七割くらいが輸入製品だった。前回ともう一つの違いは、今回はスタッフの一人と一緒におすすめランキングを作ったことだ。前回みたいに全ての製品のアピールを一から自分で考えるより、今回のほうが簡単だったが、説明してくれた製品が全部すばらしかったので、一番好きなものがなかなか選べなかった。</p> <p>最後に焼きたてのどら焼きを食べさせていただき、宣伝用の写真を取った。自分でどら焼き作りもためして、ホットケーキ作りみたいだと思っていたが、きれいな焼き方が難しかった。</p>
第 3 回 (11 月 17 日)	<p><茶房「畳」にて、おもてなし研修・接客></p> <p>三島家具インターンシップの三日目ははじめは、群馬県生活文化スポーツ部の人とのインタビューだった。「日本に何で興味を持ったか」や「インターンシップはうまくいっているか」のような質問を聞かれた。その後は本日のカフェの仕事を始めた。いろんな食べ物やお茶の用意をやらせていただいた。残念ながら、その日のお客数が少なかったもので、かなり暇だった。スウェーデンにてカフェで働いた経験はないが、ラーメン屋のアルバイトと比べると、カフェのほうが食べ物の見た目には厳しいと考えた。</p>
第 4 回 (11 月 19 日)	<p><終日配送業務補助></p> <p>四日目は朝 8 時半から配達だった。トラックに乗って、いろんなお客さんの家に行った。初めてこのような仕事をしたが、スウェーデンで家具を送ってもらったことがある。日本の配達のほうがずっと丁寧でお客さんの家を汚さないように、非常に気をつける。外国人の配達でお客さんが驚くほど嬉しかったのが楽しかった。いろんなスタイルの家を見られたのが楽しく、今までインターンシップで一番おもしろかったと思う。</p>
第 5 回 (11 月 24 日)	<p><「STYLE'S STYLE WORK'S」搬入・会場設営・コンセプト説明></p> <p>最後のインターンシップの仕事はイベントの準備だった。私はテントを立てたり、壁を運んだり、照明を取り付けたり、ジェネレーターを準備した。今まで初めて体験したことが一番少ない日だったかもしれないけど、こんなに時間や力を一つのイベントに入れることがすばらしいと思った。スウェーデンで似ているようなことはやったことがないので比べられないけれども、皆が一生懸命やっているところを見て、感動した。丁寧に計画が立っていたので、問題が一つもなかった。</p>

2. 2 フォローアップ調査の結果

業務日誌を踏まえ、インターン生に対しフォローアップ調査を行った。質問内容は上述（1. 4）の通り 7 項目とした。原文は英語であるが、英語部分は割愛し、著者による翻訳を下表にまとめた⁸。

表 2 フォローアップ調査のまとめ

質問項目	回答
(1) 自身の学びについての事前・事後の比較検討	
1) インターン前後における日本の家と北欧家具についてのイメージ	<ul style="list-style-type: none"> ・インターン前：あまり考えたことはなかったが、おそらく西欧の家具は日本の家具に不釣り合いで、日本の家には日本の家具が似合うだろうと考えていた。 ・インターン後：家具がよく設計されており、質の高いものであれば、家の様式（日本であれ、西欧であれ）などはほとんど関係と感じた。個人的には、一つの部屋に全て同じデザインの家具が良く合うと思うが、異なるスタイルが混在する部屋もあって良いと思う。
2) インターン前後における日本企業に対するイメージと日本で働くことについて	<ul style="list-style-type: none"> ・インターン前：常に真面目にかつ休みなしで働いており、仕事場では遊び心もなく、仕事ばかりに集中している。 ・インターン後：インターン前のイメージとはかなり異なっていた。日本人はほとんど休みが取れないかもしれないが、（少なくとも三島家具の）仕事場はとてもフレンドリーで親しみやすく、第二の家族のように感じた。長い時間働く日本人にとってこれは必要なことかもしれない。
(2) 本事業が「双発型インターンシップ」であることを踏まえた振り返り	
3) 本インターンシップから得た最大の学びとは何か	<ul style="list-style-type: none"> ・最大の学びは、日本人の仕事に対する考え方を学んだことだと思う。本当かどうかは定かではないが、私が感じたことは、日本人はただ働くだけでなく、働くことを楽しんでいるように思える。日本人にとって仕事場や仕事仲間は、第二の家、第二の家族とも言えるのではないか。 ・スウェーデンでは多くの人々がプライベートと仕事を明確に分けているように思う。例えば、仕事場では仲間にプライベートなことで相談したり、話したりすることはほとんどない。でも日本ではそれが出来ているのだ。
4) 三島家具に対する最大の貢献とは何か	<ul style="list-style-type: none"> ・あまり確証はもてないが、それでもなお販売されている家具の価値について、（日本人スタッフとは）異なった視点からいくつかの提案が出来たと思う。例えば、良いなあと感じた家具であっても、夕刻にキャンドルに火を灯しながら、落ち着いた、リラックスしたりすることができる色合いもあると思う。 ・家具がどのように私たちのムードに影響するかを考えることの大切さを（日本人スタッフとは異なった観点から）示すことが出来たのではないか。
5) 三島家具は A 君をインターン生として採用することでどのような学びがあったと思うか	<ul style="list-style-type: none"> ・私がインターンしたことで、お客さんからするとお店で何が起きているのかなあと興味を持って頂けたかもしれないが、お店のスタッフにとっても異なった文化や考えを持つ人から学ぶという機会が提供できたと思う。仕事内容ではそれほどではないと思うが、異なる背景を持つ人々にどのようにお店の商品を売り込むかといった、これまでとは異なる発想のきっかけにもなったと思う。
6) 同じ機会があれば、他の留学生に勧めたいか、そしてそれはなぜか	<ul style="list-style-type: none"> ・ぜひ勧めたい。将来の目標が家具屋さんで働くことを希望していなかったとしても、新しいことにチャレンジすることは多くの新しい出会いをもたらす。また、様々なことを学ぶ機会である。 ・大学での成績にもまして人々との交流がいかに大切か、これまで幾度となく教えられてきたが、ぜひ多くの皆さんにもバイトや大学の勉強だけでなく、外に出て多くの人々と交流して欲しい。
7) 自由なコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・特にあるわけではないが、同じような機会がより多くあれば、私はいつでも興味・関心をもって臨みたい。

2. 3 受入企業側からのコメント

本事業は、受入企業である有限会社スタイル三島家具店にとっても様々な形でメリットがあったようだ。インターン前の企業側の想定では「自社の事業・商品を、インターンシップを通して認知することにより、日本人以外の外国籍コミュニティへ SNS などを通じた情報提供の発信源となってくれる可能性」が指摘されている⁹。また伊勢崎地域を知り、その地域の風習や文化などを学ぶ機会となるのではないかと、といった点も期待されていたようだ。企業側はさらに、スタッフとの異文化交流はもとより、北欧家具を扱う受入企業ならではの着想で、「IKEA 発祥の地であるスウェーデン生まれの A 君を採用することは、北欧の厳しい気候環境で必然的に家の中にいる時間が長く、インテリア先進国で育った A 君の視点」をスタッフが学ぶ機会となると考えている。加えて「ダイニングテーブルでの食事やソファで寛ぐ時間の使い方がまだまだ未熟な日本人にとって、A 君の実体験を通したお客様へ接客は、非常に説得力・価値があると思われる」と指摘している¹⁰。

インターン後の企業側コメントでは、A 君の日本語能力が高く評価されており、「日本人スタッフと一緒に働く為に、外国籍の方には言葉が必須」と指摘。その上で「A 君は言葉も丁寧で、精神的にも日本人と近いところもあったのが本当に良かった」と述べている。さらに、A 君が作成したブログを見て来店したお客様から契約を頂いた、との嬉しい報告もあった。最後に、担当者から「なにより人柄が素晴らしかった」「こちらも初心に戻れるような時間で、一緒に働けて気付きのある貴重な時間となりました」とのコメントを頂いた¹¹。

3 意義と今後に向けた考察

3. 1 大学としての意義

本学には、ヨーロッパやアジアからの「交換留学生」が毎年、複数名在籍している他、交換留学提携校以外からの「留学生」も在籍している。近年ではまた、外国にルーツを持つ学生たち（外国籍の学生等）の数も増えている。こうした中、本インターンシップ事業は本学において次の4つの点で有意義であったと言える。

対留学生向けの地域連携事業の実践 本インターンシップ事業が、その対象を日本人学生ではなく、留学生に向けて実施したことの意義は大きい。本学では様々な地域連携事業が展開中であるが、それらは留学生と日本人学生を分け隔てることなく、全学生を対象としている。しかし事業の中身や仕事・任務内容等、さらにはプロジェクトの効果的な実施や運用に必要とされる日本語能力を踏まえると、そこに積極的に参加できる留学生は少ない。

そんな中であって本インターンシップは、当初より留学生を対象として事業設計したことで、留学生自身が地域連携を育む主体となりながら、実践的に学ぶ機会を提供しているのである。毎年一定数の留学生や外国にルーツを持つ学

生らが在籍する本学にとっては、類似した事業の提供と継続が望まれるのではないか。

インターン生自身の学びと波及効果 インターン生自身の学び自体が大きな成果として挙げられる。今回の事業では特に、A 君の日本で働くことに対するイメージの変化に注目したい。インターン前の彼は、日本人や日本企業に対して「常に真面目にかつ休みなしで働いており、仕事場では遊び心もなく、仕事ばかりに集中している」と考えていた。しかしインターン後には、休暇は少ないかもしれないが「仕事場はとてもフレンドリーで親しみやすく、第二の家族のように感じた」と指摘。そしてこれは「長い時間働く日本人にとって必要なことかもしれない」と、踏み込んだ解釈を示した（上述の表 2 のうち 2）や 3）を参照されたい）。日本企業に対する「大変さ」や「仕事ばかり」「休みなし」といったイメージは、外国にルーツを持つ人々にとっては精神的な壁となり、日本企業で働くことへの躊躇や諦めにつながることもあると思う。ゆえに、そうした先入観やイメージの修正を、実際の就業時ではなく、在学時において経験できたことは、A 君自身にとっては大きな学びであり、将来への見識となったのではないか。

以上のような彼の経験はまた、様々な SNS ツールや大学内の各授業・ゼミなどにおいて、他の留学生らにも伝達・共有されることが期待されるが、これは留学生と地域社会をつなぐ上でも有益である。実際、A 君の活躍を SNS などで知り、刺激を受け、さらなる学びへの動機付けを得た学生がいた他、SNS を通して三島家具を知った学生もいた。一方、三島家具やその顧客の立場からすると、インターン生の存在を通して本学を知ったり、再認識したりする場合もあったと思われる。

「双発型インターンシップ」による学び合いの実現 通常のインターンシップであれば、インターン生の学びが中心となりがちだが、三島家具スタッフの感想やコメントなどから、今回の事業は三島家具側にとっても大きな学びがあったと思われる。三島家具の担当スタッフからは、「インテリア先進国スウェーデン生まれの A 君の華やかさもあり、お店に洗練度を与えてくれた」との声が届いており、北欧家具を扱う三島家具ならではの発見があったようだ¹²。とりわけ、三島家具店での商品オリジナルランキングの作成や、ブログによるランキングの発表は、スウェーデン人から見た日本家具と北欧家具を評価することでもあり、日本人スタッフにも様々な気づきの機会を提供する課題設定であったと言えよう。

外国にルーツを持つ学生たちの就業支援策の検討に向けた具体的ケースの集積
本学では昨年度から伊勢崎市の多文化共生に学ぶ実践を行っており（例えば「群馬県伊勢崎市における『多文化共生社会』の現実に学ぶ～本学と地域 NPO との連携を通して～（代表：西舘崇）」）。本事業は「地（知）の拠点整備事業」地域志向教育研究の一環として行われている）、在住外国人の目線に立ったサポートの在り方を学生教育として進めている。右事業の中長期的な課題の一つは、本学が所在・隣接する地域社会にて、いかに留学生を含む在住外国人らの就業支援を行うかである。この点において、今回の事業における A 君の業務日誌やインターン後のフォローアップ調査内容は、一つの具体的な経験データとして、中長期的な就業支援策の検討材料に活用できればと考える。

本事業ではまた、職場の担当スタッフより「(A 君の) 人柄が素晴らしかった」との指摘を受けたが、これは特筆して記録に留めたい。その含意は、留学生だからとか、外国籍の学生だからとかを問わない「人格教育」の重要性だ。外国人の就業支援となると、兎にも角にも「日本語」のレベルを上げることや、「専門用語」「専門的技術」などを習得すること、「日本文化を理解すること」などが求められる傾向にあるが、まず基調にすべきなのは人格や人間性にあるのではないか、と思うのである。

3. 2 さらなる実践と研究・調査に向けた論点

本事業への想定され得るコメントを幾つか取り上げ、今後の研究と実践に向けたさらなる考察の糸口を掴んでおきたい。

外国にルーツを持つ学生向けのインターンシップの‘かたち’ まず、本インターンシップ事業は「双発型」の学び合いを中心に据えたプログラムであったが、何を目的とするかによっては様々なインターンシップの‘かたち’があり得るだろう。本学が実施している様々なプログラムにも多くのヒントがありそうだ。

一方、群馬大学が実施する「ハタラクラスぐんま」における「プロジェクト型インターンシップ」は、留学生を対象としている事業としては先駆的だ。これは、県内の企業から提示された課題に対して、日本人学生と留学生が一年間かけて共に取り組むプロジェクトである¹³。参加者たちはそこで、対象となる地域や課題についての情報収集から、課題解決のための仮説構築、そして現地調査の手法を学んでのフィールドワーク実習などを行い、最終的には課題解決策の提案をするという。通常のインターンシップの概念を超え、学術調査・研究の面も備えた壮大なプロジェクトである。本稿の問題意識に引き寄せて言えば、この事業は、地域企業が抱える問題を日本人と外国人が協力して解決することを目指している点で、問題解決力の涵養や地域企業とのネットワーク構築が育まれることが期待

されており、高く評価できると思う。

私たちが実施した今回の事業は、群馬大学のものに比べれば小規模で、かつ学術調査・研究という点では性質が異なる。しかし、本事業では留学生らが実際の仕事現場に入り、日本人従業員と同じ空間で、同じことを行い、同じ空気を吸うこと（例えば、休憩時間を共にしたり、売り上げがあった時には一緒に喜んだり、売り上げがないときは悶々とした雰囲気を味わったりすることまで含めて）に大きな意義がある。なぜならそれは、課題解決型ではないものの、職場での協働そのものの可能性を具体的に追及しているからである。

教員のかかわり方 本事業は「学生による振り返りや事前／事後の比較検討まで含め、担当教員や事業設計側の介入が多いのではないか」と考えられるかもしれない。これは一方では、インターン生の自由な気づきや意見、考え方を制限し得る可能性を持つが、他方では、当該学生の小さな学びや気づきの変化を丁寧に追うという点で有意義である。

とりわけ、経験や研修データの蓄積に乏しいと思われる留学生を対象としたインターンシップ事業を、将来における就業支援に結びつけていくためには、内容をあらかじめ検討して設定した事前・事後のフォローアップ調査が必要だ。また、何を見せるか、何を体験させるかについての制度設計にも、時間をかけて取り組むことが求められると思う。

事業設計側のバイアス 本インターンシップ事業に対してはさらに、「北欧家具を扱う企業で、スウェーデン人留学生がインターンシップを行うという、あまりにも出来過ぎた展開ではないか」との指摘があり得るかもしれない。

しかしこれは、著者と多文化共生ぐんまが協議・検討を重ねた‘マッチング’の成果である。日本人学生と国内企業との間でさえ難しい「適材適所」への就業とその機会の提供を実現するためには、やはり学生の特質や学びの過程を知る大学側と、求める人材を明確にかつ具体的に提示する企業側との協議が必要なのだ。本インターンシップの成果は、マッチングを図る事前準備に大きく拠っていると言えよう。

制度上の課題や手続きについての情報提供 最後に「外国人の就業支援策を検討するのであれば、入管法やビザ発給などに関する情報提供に加え、外国人労働者が抱える課題についての考察が必要ではないか」との論点があり得る。これについては著者も同感である。外国にルーツを持つ学生たちにとっては、日本企業に就職する際に、どのような準備や手続きが必要なのか、日本人と何も変わらないのか、といった素朴でも大切な疑問が提起されることがよくある。しかし、これ

に答える体系だった情報や資料は決して多くはない。

この点に関しては、上述した「ハタラクラスぐんま」プロジェクトが「留学生のための就活活動スタートアップ・セミナー」を開催するなど、先進的な試みを実施しているようだ¹⁵。これがどのような成果を上げているのか、今後の調査課題の一つとしたい。他方、前橋市国際交流協会や多文化共生ぐんまが協力して実施した「(プレ) 国際交流サロン」事業は、一般の外国籍住民を対象としているものの、大きな可能性を持つ。今年1月に開催されたサロンでは、第一部にて税金や年金の仕組みなど、日本人にとっても高度な内容がレクチャー形式で伝えられ、第二部では「自由に何でも話すこと」を目的にした交流の場が設けられた¹⁶。このような機会にて、外国人による就業支援や就業ガイダンスを行っていくことも有意義だと思う。伊勢崎市でも同様の試みが実現できれば、同交流サロンへの積極的な参加を学生たちに促したい。

結びにかえて

冒頭の問いかけ「本学が伊勢崎市の多文化共生社会づくりに貢献できるとすれば、どのようなことが可能なのだろうか」に立ち戻って考えたい。まず、外国にルーツを持つ学生によるインターンシップ事業を伊勢崎市で継続することができれば、外国人が同市で就業する場合の（擬似的）経験データを集積し、それを市政や様々な主体（NPOやボランティアなど）と共有することができる。経験データが中・長期的に蓄積された上で、初めて就業支援に向けた具体的な分析・検討が可能になると思われる。

この提案は控えめに見えるかもしれないが、外国人を取り巻く今日の社会環境や制度上の仕組みを踏まえるならば、堅実で前向きなものだ。特に、60ヵ国以上の人々が住む伊勢崎市は、日本の一地方自治体でありながら、その様相はいわば国際都市とも言える。ゆえに、一度きりの経験や調査で一気呵成に具体策を検討するより、伊勢崎市の現状をつぶさに観察し、じっくりと学ぶこと、その上で市政やNPO、ボランティアの方々、さらには地域企業の方々と歩調を揃えながら進むことが大切だ。

多種多様な主体との協力関係を持続的に醸成していくことは、市政にとっても、本学にとっても不可欠である。というのも、学問としての多文化共生は、様々な背景を持つ人々と協働で問題解決するための理念や理論に支えられた学びであり、教育である一方、実践としての多文化共生は、様々な背景を持つ人々との協働を通して、地域社会を具体的に創造することだからである。外国人住民にとっての本市での就業は、働く場の選択という以上に、ライフサイクル全体の中での生き方や生きがいの選択である。多文化共生社会の成熟度はこの選択の成否に大きくかかっているのではなかろうか。外国人住民のサポートをしつつも、地域に生きる一員として、日本人と外国人が共に支え合う関係を構築するためには、産官学界が一体となった実践、調査・研究が求められるのである。

<謝辞>

本稿で取り上げた留学生インターンシップ事業については、NPO 法人多文化共生ぐんまの皆さま、本事業に助成頂くと共に成果報告の機会を与えて下さった群馬県生活文化スポーツ部人権男女・多文化共生課の皆さま、インターン受入れ企業の三島家具のスタッフの皆さま、クオリティー・オブ・ライフの担当者さまに、大変お世話になりました。また本稿の執筆段階においては、伊勢崎市国際課の皆さまにご協力頂いた本学でのゲスト講演会その他、伊勢崎市の多文化共生の現状を学びながら、外国人と日本人が支え合う関係を具体的に模索するシンポジウムにも参加させて頂きました。伊勢崎市青年会議所の皆さまには、地域の活力につなげるための協働のあり方を検討するパネルディスカッションにお誘い頂きました。この場をお借りして、関連する皆さまへのお礼を申し上げます。本稿の記述に誤りがあるとすれば、その一切の責任は著者に帰すものです。

※本稿の成果の一部は、本学における「地（知）の拠点整備事業」地域志向教育研究（群馬県伊勢崎市における「多文化共生社会」の現実に学ぶ～本学と地域 NPO との連携を通して～）から助成を受けたものです。

注

- 1 群馬県ホームページ「外国人住民数の状況」を参照
(<http://www.pref.gunma.jp/04/c2200234.html>) (閲覧日 2018 年 2 月 25 日)。
- 2 群馬県ホームページ「多文化共生推進の取り組み」や結城恵 (2014)「地域人材としての外国人住民とともに地域活性化をめざす～平成 24 年度群馬大学・群馬県「多文化共生推進士」養成ユニットの紹介～」『国際文化研修 2014 冬』vol. 82、40-43 頁を参照。なお、2010 年から 2015 年までの事業期間を通して計 19 名の推進士が誕生している。
(<http://www.pref.gunma.jp/04/c1500243.html>) (閲覧日 2018 年 2 月 1 日)。
- 3 三島家具ホームページを参照 (<http://mishimakagu.com/>) (閲覧日 2017 年 9 月 3 日)。
- 4 群馬県ホームページ「群馬県多文化共生推進会議」を参照
(http://www.pref.gunma.jp/cate_list/ct10000101.html) (閲覧日 2018 年 2 月 15 日)。
- 5 厚生労働省群馬労働局 (2018)「外国人雇用状況の届出集計結果(平成 29 年 10 月末現在)」によると、群馬県全体での外国人労働者数は過去最高の 29,319 人であり、伊勢崎地域は太田地域 (7,257 人 前年比 22.8%増) に次ぐ 6,866 人である。また同地域の過去 5 年間の外国人労働者の推移は、4,490 人 (2013 年)、4,554 人 (2014 年)、5,184 人 (2015 年)、5,951 人 (2016 年)、6,866 人 (2017 年) である。
- 6 外国人労働に関する諸問題についての考察は、本稿の目的ではないためここでは行わないが、本稿の執筆中においても高崎市における外国人受入団体に関する問題 (例えば「実習生の労組脱退要請」『上毛新聞』2018 年 1 月 22 日付を参照) が明るみに出たり、「外国人実習生の失踪」に関する問題が全国紙などで指摘されたりしている (例えば「外国人実習生の失踪 急増」『朝日新聞』2017 年 12 月 13 日付 (東京) を参照)。

- 7 英文の業務日誌については、西舘崇（2018）「平成29年度 群馬県多文化共生推進士連携事業『伊勢崎地域産業での留学生インターンシップによる多文化共生職場づくり実践活動』における学生の学びと本事業の意義について」（留学生インターンシップ事業報告書の別添資料）の1頁～3頁を参照されたい。
- 8 英文の回答については、前掲書、西舘（2018）の4頁～7頁を参照されたい。
- 9 平成29年度 群馬県多文化共生推進士連携事業「伊勢崎地域産業での留学生インターンシップによる多文化共生職場づくり実践活動」実施報告書から一部を抜粋するとともに参照。
- 10 同上、実施報告書から一部を抜粋するとともに参照。
- 11 以上については同上、実施報告書から一部を抜粋するとともに参照。
- 12 平成29年度多文化共生シンポジウム「ぐんまの宝『外国人』と一緒に未来を創る～多文化共生共同活動事例発表～」による本事業の報告資料及び登壇者らの発言内容を参照。
- 13 この詳細については、結城恵（2014）「『ハタラクラスぐんま』プロジェクトによるインターンシッププログラムの取組」ウェブマガジン『留学交流』2014年8月号、Vol. 41を参照されたい。
- 14 本事業は、多文化共生ぐんまが、平成28年度 群馬県多文化共生推進士連携事業の一つとして、株式会社クオリティー・オブ・ライフ及び株式会社 DS in Japan（伊勢崎市に所在する日本国内人材派遣、技能実習生受入、通訳等を行う会社）との連携のもと行ったもの。
- 15 「ハタラクラスぐんま」特設ホームページ（<http://ryu-kyoten.jimu.gunma-u.ac.jp/>）（閲覧日 2018年2月15日）や、群馬大学ホームページ「新着情報」（<http://www.gunma-u.ac.jp/information/23900>）（閲覧日 2018年2月15日）などを参照。
- 16 大谷明・清水美香・西舘崇（2018）「日本人と外国人との交流ができる国際交流サロンづくりの為に在留外国人意識調査」平成29年度 多文化共生シンポジウム（群馬県主催）「ぐんまの宝『外国人』と一緒に未来を創る～多文化共生共同活動事例発表会～」（共同報告）を参照。

Abstract

The Significance of an Internship Program for One International Student at a Local Company in Isesaki, Gunma

Takashi Nishitate

This research paper examines the significance of an internship program designed for one international student at a local company in Isesaki, Gunma, Japan. Lately, Isesaki has become the most preferred choice for foreigners wishing to settle in Gunma. Since people from over 60 countries are making Isesaki their home every year, the local government, along with local non-profit organizations (NPOs) and volunteers, has been taking different measures to meet the various needs of the foreign residents. The internship program designed for international students by Kyoai Gakuen University in conjunction with the NPO, "Multicultural Symbiosis Gunma," was implemented at a local furniture company named "Mishima Furniture" in Isesaki in November 2017. The internship was productive not only for the student participant to envisage his future career, but also for people in the company to learn from a student's point of view. This internship program also provided the university with precise data about the program, which, in turn, will enable the university to create more effective internship programs for international students in the future. The result of this internship would be considered to be one of the important case studies when creating job opportunities for foreign residents in Isesaki.